

「牧師室」(2016年2月21)

時間があれば読みたいと思っていた本の一つに白井聡著『永続敗戦論』があります。教会の社会委員会の人たちも読まれて、推薦されたものです。「戦後日本の核心」という副題が付いていることから分かりますが、戦後70年が経ち、日本は経済的には、驚くべき成長を遂げましたが、一つ何も変わっていないことがある、と著者は言うのです。それは、書物の一節にもなっている言葉ですが、「私らは侮辱の中に生きている」と言うことです。侮辱の中にとというのは、わたし流に言えば、尊厳を持った一人の人間として扱われていないと言うことです。その良い一つの例が、福島第一原発の事故以降、「あの事故をきっかけとして、日本という国の社会は、その本当の『構造』を露呈させた」と著者は言います。その構造は、国民一人一人の考えが反映されず、国家間の重要事項は、既に、どこかで決定していると言うことです。国民がどんなに頑張っても、だめだと言うのです。そうになると、当然、わたしたちが努力して来たことは、何だったのだろうかと言う、何とも言えない、絶望感・侮辱に襲われるのです。「皆さんの考えを伺ってから決めましょう、と指導者は、ていの良いことを言いますが結論は既に出ています。これが日本的な「無責任」だと著者は言います。

また、次のような文章もあります。「敗戦」の隠蔽と言う小見出しがついている箇所です。「8月15日戦争は日本の敗戦によって終わった。しかし、当然、戦争が自然に『終わった』わけではない。戦争は、日本の敗北によって終わった。にもかかわらず、この日は戦争の『終わった』日として認識されている。ここにすべてがある。純然たる『敗北』を『終戦』と呼び換えるという欺瞞によって戦後日本のレジーム(政治体制)の根本が成り立っていると言っても過言ではない」。これは、本当に恐ろしいことです。